武蔵野美術大学建築学科・日月会

Forma-Foro

フォルマ・フォロ

Nov.1. 2001

vol.2 第2号

目次

フォルマ・フォロ エッセイ
長尾 重武

インタビュー
磯崎 新

卒業生の素顔
井上 揺子

VOICES/
土の茶室
小野 淳

TOPICS/
建築祭に参加して
佐奈 芳勇

製図室/
建築祭 2000-2001
酒井 博基

表紙写真:
「エレクトリック・ラビリンス」
第14回ミラノ・トリエンナーレ1968
写真提供：GAphotographers

思いっきり生きよう

長尾 重武　NAGAO,Shigetake
武蔵野美術大学学長

『フォルマ・フォロ』、簡潔でスッキリした日月会報の第2号が出た。編集者諸氏の尽力に敬意を表したい。

これを読む建築学科卒業生の皆さんは、卒業してから、すでに何年を過ごしただろうか。そして、この間、どのように生きてきただろうか。皆さん一人一人の歩み、皆がつくりあげたもの、それらは必ずしも建築に限らないかもしれないが、それこそが、皆さんの将来を切り開いていく。そして、それがいつしか皆さんの巣立った建築学科の評価を形づくっていくはずである。

私はといえば、東大助手時代の1972年から11年間、武蔵美の非常勤講師として、全学の学生を対象にした「西洋建築史」を講じた。その後、東北工業大学助教授に転じて、武蔵美を去り、5年目に、建築学科主任寺田秀夫教授から一通の手紙を頂き、お目にかかったのちに、武蔵野美術大学に赴任した。幸いにも著作と制作に没頭できた11年間が経過した。

しかし、突然1999年4月、学長になってしまった。それは予期せぬ出来事で、困惑の中で猛勉強の連続であった。著作と制作が出来なくなってしまった。そして昨年末、詩集『きみといた朝』(思潮社)を刊行し、目下、句集の発行準備中である。

皆さん、精一杯生きよう。苦難や歓び、落胆と失意、夢や希望、それが、それが、人生ではないのか。

日本と建築をめぐって

磯崎 新　ISOZAKI,Arata

今日は磯崎さんにムサビにいらしゃった頃のことを少し伺いたいと思っています。どんなきっかけでムサビに来られ、そしておやめになったのでしょうか。

磯崎：僕はあの頃は独立してアトリエを持っていたけれども、あんまり仕事もないので丹下さんの仕事を手伝っていた。芦原さんがムサビに新しい建築学科をつくるので、丹下研からもひとり位連れてゆきたいということだったと思う。それで僕が言われたのは、未だかつてない新しい建築教育をするということでした。それならということでムサビへ行き始めたけれど、だんだん話がおかしくなってきた。カリキュラムを編成する段になると、文部省のいう一級建築士の受験資格認定などもあり、それを前提としたカリキュラムの編成しかできない。そうすると何のことはない、今までと同じようなカリキュラムになる。つまり間接的には政府(文部省)からコントロールされた、規格にはまった教育しかできない。これでは新しいタイプの自由な建築教育は無理という感じになってきたので、僕はその枠を破れと言ったのだけれども、そうすると大学教育にはならない、各種学校になってしまうという。そんなことからだんだん気持ちが遠ざかっていってしまったように思います。

その他に大学の先生は自分の研究、制作をしているだけでは済まない。大学のアドミニストレーションがあり、それに使う時間は莫大です。それを避けようとすると専任ではいられない。そうすると僕にとって、大学の教員という職業は意味をもたないと思えてしまう。そうこうしている内に学生運動も盛んになってきて、僕は発想的には学生側だから、ストライキもいいじゃないかといっているわけで、そのままいたら造反教師ということになったのだろうけど、そんな時にUCLAから声がかかり、ムサビをやめて日本を出ることにしたのです。

日本の大学における建築教育はについてどう考えていらっしゃいますか。

磯崎：日本の大学での建築教育は建築家を養成していないと思います。建築技師の養成であって建築家の養成ではない。だから建築学科を出ても建築家にはなれない。建築家になるにはその後10年ぐらいかけて独学で勉強した人が、何とか建築家として生き残る。それ以外のおおむね9割位の人は脱落してゆく。日本はそういう構造になっていると思います。

いろいろ最初から問題があったようですが、何かムサビで思い出すことはありますか。

磯崎：当時、建築設計といえば例えば住宅だったらリビングがあって、キッチンがあって、動線がどうしたというんじゃつまらないので、お前はゾウになれ、お前はキリンになれ、お前はヘビになってそれぞれ自分の小屋を設計しなさいという課題を出して、最初のレクチャーは動物園に集まれと学生にやった。そうしたら大学からおこられた。そういうのは大学でやりなさい、勝手に学生を外に連れてゆ

かないでといわれました。その時考えていたのは、例えば見えない家、コウモリの家なら赤外線でつくるとか、ヘビの家なら???と新しい建築の発想につながってゆくと考えたのです。

ムサビでの話はこれぐらいにして、これからのことを少し伺いたいと思います。21世紀を迎え、これからの建築はどうなってゆくとお考えですか。

磯崎：建築評価基準なり建築の考え方が、過去のおそらく一世紀以上続いてきたひとつの筋書きが、おそらくこの10年で完全に崩れた状態になるということです。その一番の原因は、19世紀に社会、国家も全て計画したらその通りにつくっていけるというプランニング（計画）の概念が成立して、それが共産主義革命、社会主義革命につながるし、計画経済、建築計画、都市計画、と全部計画という名前がつけば話がつくという時代が一世期半から二世紀続いてきました。それが全部ダメになった。その時期を僕は1968年頃だと思っているのだけれど、目に見えてダメになったのは1989年のベルリン壁の崩壊と、1991年のソビエト連邦の崩壊だったと思います。

それで僕にとってみると面白いのは、そこでおこってゆく事件の発生の仕方です。今まで評価されてきた古い形式の建築家、例えば巨匠がいて、その巨匠に続いてゆく建築家がいてという建築を、みんながパーと忘れてしまう時期がくるでしょう。もう5年以内にくると思います。言っていることは、20世紀のすべてが、計画という概念も建築のデザインも、モダニズムも何だかんだもそうした部分を含めて、みんなパーと忘れてしまって、組み換えられた時代がおこるだろうと僕は推定しています。でその時、建築は残るかどうか。

軽井沢の山荘

建築家という職業もどうなるかわからない。そういう時に、まず決定的に建築の美的な評価基準が変わると思います。今までのすべての評価基準が使えなくなる。建築家というプロフェッションの中で組み立てたロジックは社会的に通用しなくなります。一方建築を評価する面では、無知が強くなる。政治家とか経営者であるとか建築に無知な人が建築の価値を決めてくる。だから問題がややこしくなるのだけれど、建築に対しての知識の無さ、理解の無さが建築をきめてゆく、そういう時代にしばらくなると思います。価値基準が完全にひっくり返る訳です。

具体的にはどういうことでしょうか。

磯崎：例えば言いかえると、ピカソが出た時、ピカソはそれより前の絵画と変わっていたけれど大家になった。そして今、そのピカソを越えたのは何かといえばミッキーマウス。もしミッキーマウスがピカソを越えたならば、そこには価値の転換があります。で、建築はピカソまでは何とかやれた。次にミッキーマウスだといわれたら建築はデザインの方法がなくなるのではないでしょうか。事態は凄いスピードで進行していると思います。

難しい時代になってきましたね。

磯崎：どの時代だって難しいのですよ。僕は若干の経験は得ているけれど、常に先行きは不透明です。誰もまともなことなんか言わない。だからいつも一種の賭けみたいなものです。賭けて失敗するかしないかだけの話。

失敗して挫折した数の多いほど人生も良いのではないですか。僕なんていつも挫折の連続だった。

最後に若い人に何かありませんか

磯崎：僕は60年代にモンローの椅子をつくった。僕の時代ではマリリンモンローは神話的な存在でした。今の人にとってそれは、綾波レイ。エヴァンゲリオンのキャラクターです。綾波レイは苦労人で、アンドロイドで人間ではないけれど、おたくのアイドルです。事態は、生のマリリンモンローからそうしたものに変わっています。ですから今の人に、綾波レイで何かをつくってほしい。椅子でもいいし、コンピューターソフトでもいいし。

今日はお休みのところどうもありがとうございました。

軽井沢の山荘・方丈の小屋

2001年8月13日　軽井沢のアトリエにて
インタビュアー:林 美樹、須藤和由
協力:小池ひろの
撮影:酒井博基

建築祭に参加して

佐奈 芳勇　SANA,Yoshio
14回生　佐奈建設

第2回を迎えた武蔵野美術大学の「建築祭」は、1年生から3年生の作品展が2001年1月10日から13日まで、卒業制作と修了制作展が1月26日から28日まで、8号館3階の会場で催されました。その中で、催しが二つありました。

一つは、今年で2回目となる日月会が関わった「日月会建築賞」です。選考の対象は3年生後期の作品とし、会期中に、選考と賞の授与が行われました。今回の選考委員は、井上揺子（11回生・審査委員長）、渡辺英二（5回生）、佐奈芳勇（14回生）、小宮功（15回生）、林美樹（16回生）、の6名でした。受賞されたのは以下の方々です。

・太陽賞：竹山コース　Dグループ
（立仙智子・片山亜水・関英則）
・満月賞：宮下コース　中島史恵
・三日月賞：保坂コース
田中映子.宮本晃代
・新月賞：竹山コース　Eグループ
（下村佳子・宇田川奈津子・加藤康正）

受賞者には、賞状と記念品が須藤日月会会長より手渡されました。名前が読み上げられた学生が、感激のあまり泪を流すひとコマもあって、この賞が学生達のはげみになりつつあることが実感されました。

もう一つは、日月会会員による作品展（OBギャラリー）です。現役の学生の作品とOBの作品が同時に展示されるのは、おそらく建築学科始まって以来の試みといえるでしょう。参加したOBは、相沢韶男（1回生）、井上揺子（11回生）、青山恭之（14回生）・永田博子（15回生）、小宮功（15回生）、岩下泰三（15回生）・更田邦彦（16回生）・岩岡竜夫（16回生）、小川弘（15回生）、林美樹（16回生）の10名でした。展示された作品の前で各氏から作品の解説がなされ、学生ならびに先生方との間での議論も熱く展開されました。

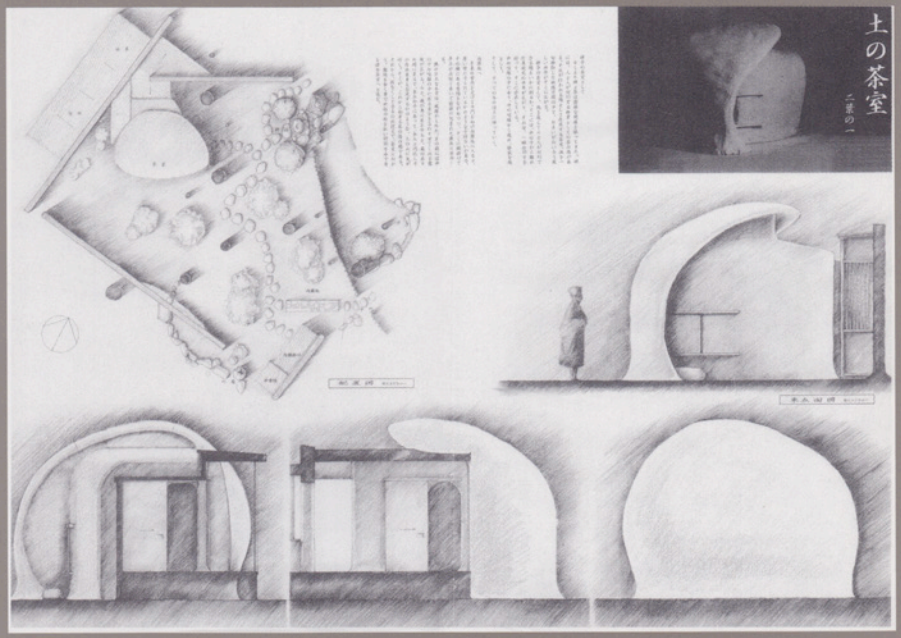
尚、来年の「建築祭」期間中の2002年1月12日（土）には、平成13年度の日月会の総会を大学にて行う予定です。

日月会建築賞・授賞式

OB展

土の茶室

小野 淳　ONO,Jun
22回生　ジェイアール東日本建築設計事務所



昨年、「平成の二畳台目の茶室」のコンペで最優秀賞を頂きました。大学を卒業して10年も経つと建築の基本的な技術はまがりなりにも身についてきて「さぁ、これからどうするか」という段階に差し掛かっている時期にこの賞ですから、ちょっとは自分の自信にもなりました。

このコンペは、昨年の9月末に募集がありまして、馬場璋造さんがコーディネーターを行い、榮久庵憲司さんが審査員で、実際に建てる事を前提にお寺の中に茶室を計画するというものでした。

お寺の中という事もあって、茶室は人と人との対峙する場という事を中心に考えています。そのために二人だけの世界以外の物は極力排除しようと、それには囲まれた壁が必要でした。しかも、壁は貧弱なものでなく、縄文的な力強さを感じるものにしなければならないと思っていました。壁を造る素材は、特別なものでなく昔からある土が最適ではないかと、ここまで決まった段階で以上の事を念頭に置いて、情念に任せて粘土に触れながら1/10の模型を創って、それを基に図面におこしました。内部空間は壁も天井も土壁で唯一象徴的なものとして床柱だけが、力強くそびえています。ただ、その床柱も天井は支えていませんが…。

建築は人のために創るものですが、茶室は作家の情念を前面に出せる数少ない建築だと思っています。今回のコンペもその情念の部分を評価して頂いた結果だと思っています。

講評の中で榮久庵さんが「利休の繭が生まれてきたように…」と評していただいたのが印象に残りました。作品には利休という言葉は入れなかったのですが、常に意識していたのが妙喜庵の待庵でしたから。ただ、受賞の後、実際に妙喜庵の待庵を見る機会があったのですが、実際に待庵を見て感じたのは、弥生の系譜から見た縄文という印象でした。

この茶室の原案は、大学に居た頃に考えていたものです。その頃、素材に興味を持ち始めていまして、例えば、和食を食べていていつも感じるのですが、やはり和食は素材だなと。素材の味をいかに活かしているかによって、料理人の心意気まで見えてくる。その生活に根ざした感覚は、建築にも通ずるのではないかと。その考えが基になって実現した第1作が自邸で、自邸はコンクリートの素材をいかに活かすかという事を基に考えています。そして、今回の土をテーマにした茶室とつながっていきます。このコンペは実施を前提にしていますが、実際に建てるのは、コンペの賞とは別に上位入賞者の中からヒアリング等によって決めていく形を取っていて、現在、実施の方は小康状態に入っているといった感じです。建築業界は狭い世界だと思っていましたが、このコンペには偶然にも大学の同期の小形裕美子さんも入選していました。彼女とは、1996 建築学科作品展の冊子にも見開きで並んで載っています。興味のある方はどうぞ。

教えていただいた精神

井上 揺子　INOUE,Youko
11回生　井上揺子設計アトリエ

私が入学した頃の建築学科は、現役の新入生が少なく、特に男子学生には3歳も4歳も年上の同級生が何人もいた。私のような年下の同級生は、彼らにまるで半人前のようにあしらわれた覚えがある。私は同一ラインにたたせてもらえないやりきれなさを感じたが、確かに年上の同級生たちは、あまり建築のことを深く考えずに建築学科を選んで現役で入学してきた自分とは違っていた。建築談義に花を咲かせる時に飛び交う建築家や作品の名前は新鮮な響きを持っていたし、そんな時の同級生たちの熱の入れように、にわかに姿勢を正し、必死に彼らの言葉を追っていた。あの頃の私にとっては先生からでなく、同級生に教えられることが多かった。建築論に始まり、かっこいい図面や模型の製作手段に至るまでだ。課題の講評では、興味深い作品以外は放って置かれた。先生が登場するのは手応えのある作品をつくった時のみであった。その時は相手が先生であっても、ものをつくる感性においては同等に扱ってもらえると、我々学生は受け止めていた。そういうやり方で、ものをつくるために絶対的な心構えや規則があるのではなく、自由の中でつくる精神を鍛えてもらったという気がしている。

学生生活の後半に入って、坂本一成先生の何回目かの課題に取り組んでいた。最終的な提出作品は武蔵美大の吉祥寺校舎の敷地に、何かを計画することであった。何かをとは何でもいいのであって、その何かを見つけるためにどこをどう突破したらよいのやら、やりにくい課題であり、そのあたりの助け船として、グループごとに近隣調査のレポート提出が義務づけられた。図書館で吉祥寺の資料を見る、駐在所や商店街、買い物途中の主婦にインタビューするといった地道な作業を行った。一方、その頃の坂本先生は新進気鋭の若き建築家であり、優秀な頭脳、鋭い感性が先生の一言、仕草から滲み溢れ、強力な緊張感を放っていらっしゃった。多木浩二さんが坂本先生の作品に言及された論文が新建築に連載され、学生の間でも話題になった。先生へあこがれを抱いている学生たちにとっては、現実的で地道な調査よりも、難しい言葉を重ねて建築的な概念を論ずることへ一気に飛び越えたい衝動があったのだろうと思う。同等に扱ってもらいたい願望が何故か反抗的なベクトルへと発展し、私のグループは皮肉な言葉や挿し絵のあるレポートらしきものを提出することになった。当た

戸越銀座の家　1993-1996

り前だが、その結果坂本先生にひどく怒られ、再提出となった。その時グループの私以外のメンバーは全員、それぞれ個人的な課題の再提出に追われており、問題のレポートに関わる作業は一挙に私一人に掛かってきたのである。貧乏くじをひいた私は、「信じるのは自分だけ」と深く反省しつつ、それまで同級生たちが交わしていた建築論を「ただ眺めるだけでなく自分の手につかみたい」と思い始めたような気がする。その課題で私は建築をつくる罪のようなものを意識し、敷地は野原であるという想定の元に古い廃船を設置するだけの提案をした。今思い返すと、誰でも一度は通るルートを歩んだわけだ。

また日曜日に何回か同級生たちと連れだって、その頃建築雑誌をにぎわせていた磯崎新氏や原広司氏の住宅を見て歩いた。初めは在処を見つけて外から眺めて楽しむミーハーな乗りだったが、もし住人がいたら中を見せてもらおうと大胆な発想が湧き、一番年上の同級生が交渉に望んだ。学生ならでは許される傍若無人さである。交渉が成立して、粟津潔邸、原氏の自邸、それから坂本先生の代田の町屋を見せていただいた。粟津邸では粟津潔本人が吹き抜けのアトリエでオーディオを聞かせてくれ、原邸では若菜夫人がお茶をサービスしてくださったが、それぞれの住宅についての建築的な話題は同級生に任せて、空間に身をゆだねて感じ取るのが精一杯だった。代田の町屋では夫人に新建築に掲載されていた坂本先生の言葉の意味を尋ねられ、どぎまぎした。今、教え子の学生たちに建築を見学させては、質問がないと腹が立つが、私もそういうつまらない学生であったと反省する。

結局私が建築についての本を読んだり、コンペに参加するなど積極的に建築に取り組んだのは卒業してからで、大分鈍い反応だったが、自由の中でつくる精神で今もがんばっているつもりだ。そして私が教えていただいた精神を、今度は自らが若者に伝えていく番なのだと、最近思っている。

ビスケット　1996-1997

同級生の眼

金子由起子　KANEKO,Yukiko
11回生　ビーアイ・アーキテクツ

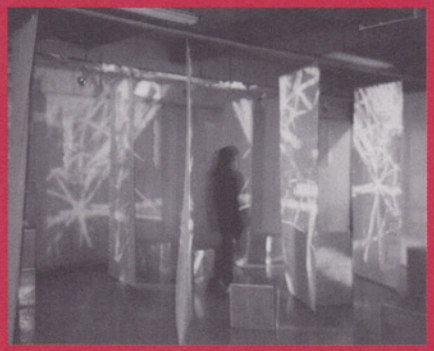
誰が何を根拠に算出したものやら定かではないが、入学当時の我々1年生の平均年齢は24.6歳だ、と言われていた。その信憑性は疑わしいが、その当時には納得させられる程、確かに大人びた輩が多かった。年齢のみならず、様々な経歴、職歴、学歴。1浪だった私もある種の焦りを感じていたが、現役で入学できた井上揺子さんにしてみれば、更なる不安を抱いていたとしても不思議ではない。大学で学んでいく過程では様々な刺激的要素が有り得るが、その中でも同級生に揉まれる、という状況は望んで得られるものではない。その点私も彼女も大変幸運だった。そのような状況で物おじせずにひたすら前向きに、貪欲に、健気に突進していく彼女の姿は、誰の眼にも明らかに印象的だった。今も変わらぬ彼女の姿勢だ。今や教える立場。健闘を!

八百トック　1995-2000

酒井 博基　SAKAI,Hiroki
武蔵野美術大学大学院

今年も昨年にひき続き1月10日から14日の5日間にわたり「建築祭（学生作品展）」が開催されました。今回で第2回目を迎えることとなったこの催しでは、ますますその内容の充実を目指し、様々な試みが行われました。その中のいくつかを紹介してみたいと思います。

まず昨年の建築祭と大きく異なる点は、有志の学生による建築祭実行委員会が会場の展示計画や、DMやポスター、パンフレットの制作、各種広報活動等様々な運営に参加したことだと思います。また、レビュー前日に研究室前広場で催された前夜祭では、広いスペースを活かし、映像を映すスクリーンを複数設け、音楽をからめた多彩な演出を企画し、盛り上がりを見せました。翌日からのレビューを控え、提出を終え、疲れきった学生達には、しばしの休息の場となり、また学年を問わずお互いの作品について語り合う場となるなど、実りの多い企画となりました。


前夜祭・研究室前広場の様子

加があり、その中には普段それぞれの課題を指導されている講師の方もおられました。現役学生、卒業生らの作品が一同に展示され、作品を巡る自由なディスカッションを行う風景はまさに「祭り」を盛り上げる為の核となったのではないでしょうか。

フォーラムにおいては、ゲストとして隈研吾、川床優の両氏を招き、ネットライブを行うなど今までにない新しいムサビの建築学科の側面も見せました。

こういった様々な試みは、他学科、学外とのコミュニケーションや絶好のアピールの場としての可能性を感じました。しかし、学生が中心となり一つのイベントをやり遂げるという事の方がむしろ重要だと思います。そして、建築祭が普段の課題に取り組む時のモチベーションにつながってくればよいのではないでしょうか。極端な話、建築祭に向けて課題作品のクオリティーを上げてくる。この「祭り」がやがてそんな存在になってゆけば、とても意義のあるものになってくるのではないでしょうか。

今回はまだ学生が実行委員として運営に参加するのは初の試みだったため、まだまだいろんな問題が課題として残りましたが、これからもぜひ学生のパワーで建築祭が新たな展開を見せていって欲しいと願っています。

とんど日本にいない磯崎新氏にインタビューを申し込んだら、この日しか時間がないという。やっとのことで渋滞をぬけ、たどり着いた旧軽井沢の苔生した別荘地帯は、別天地である。別宅は黒い下見板貼りで裏に氏のアトリエ、脇にゲストハウスが斜面に沿うよう連続する。前庭には宮脇愛子氏の作品と、思索の場であろうか、地から持ち上げられた方丈の小屋がある。◎60年代から常にトップランナーとして活躍してきたArata Isozakiは今も尖っていて、しかも氏にとっての、母としての「日本」や父としての「建築」からも今や自由の身となったかのようである。建築教育に関してはなかなか辛口なお言葉に、耳が痛いのは私だけではあるまい。◎表紙のミラノ・トリエンナーレのインスタレーションは磯崎氏にとっても大きな意味を持った作品である。その問題提起は未だ褪せることなく、近々ドイツの美術館で再構成・収蔵されるらしい。◎卒業生の素顔に登場の井上揺子さんは、今年から文化女子大で助教授として本格的に後輩の指導にあたられている。◎リニューアルされた日月会もここのところ少々足踏み状態。少しでも余力のある方、挙手を。◎フォルマ・フォロに対するご意見、情報を是非編集室まで。(M.H.)

フォルマ・フォロ
Vol.2 2001.11.1

編集：林 美樹、須藤和由、青山恭之、
酒井博基、古川泰悟
デザインフォーマット：：矢萩喜從郎

印刷：株式会社 帆風
発行：武蔵野美術大学建築学科同窓会・日月会
http：//www.nichigetsu.org
東京都小平市小川町1-736
武蔵野美術大学建築学科研究室内